

# マラヤ華人文芸の発展と背景 I

## 1925～1928

荒 井 茂 夫

### 1. 前言

2. 国共合作前後の中国新文学運動概観
3. 華人文芸発展の特徴
  - イ) 先駆
  - ロ) 華人文芸のマラヤ化志向
4. 国共合作の波及とプロレタリア文学興起の間
  - イ) 政治情況の検討
  - ロ) プロレタリア文芸の始まり

### 5. 結語

### 1. 前 言

20世紀初頭のマラヤ華人社会の人口構成は、植民地産業労働者が半数以上を占める偏った姿で、そこには文芸活動を生み出せるような華人の手による文化的営為はなかったのである。しかし中国革命運動の潮流が波及するに及び、それより以後、マラヤ華人社会における中国民族主義の覚醒と民族教育の振興は普遍的となり、政治宣伝をかねた文化活動も漸次盛行して、華人社会は中国民族主義運動の潮流に突入して行く。こうした啓蒙と宣伝は教育ばかりか、辛亥革命以前からの宣伝組織である書報社における中国の出版物の紹介や、急増する華字紙を主要な媒体として推し進められて行ったのである。その過程で生まれたのがマラヤ華人文芸（以下華人文芸とする）であった。華人文芸の誕生とその背景については已に拙稿<sup>(2)</sup>で論及し、中国本土との繋がりを軸として華人の政治社会活動を検討し、その誕生の史的位置付けを試みた。

本稿ではそれに従い、中国の文学運動と政治変化、及びマラヤ華人政治社会の様相との関連を踏まえて、華人文芸の拡張期<sup>(3)</sup>（1925～1931）のうち1925年から1928年までを検討する。尚華人文芸の分期については方修の説に従うものである。

### 2. 国共合作前後の中国新文化運動概観

中華民国成立以後急増したマラヤの華字紙の多くは国民党紙であり、党紙以外の華字紙もナショナリズムを鼓吹して華僑社会と中国を連系させるための重要な媒体であった。こうした華字紙に設けられた副刊を通じて、五四運動以後の新思想を表現した文芸作品が、民族教育の使命感を抱いた多くの青年教師たちの手によってマラヤに持ち込まれて華人文芸が誕生したのである。だから華人文芸の誕生は五四運動及びそれに続く一連の中国民族主義運動のマラヤにおける展開として位置付けられ、さらには、華人文芸の誕生は、五四運動の洗礼を

受けた中国の多くの文芸団体に集う青年・知識人の意識の延長にあるということができた<sup>(4)</sup>のである。

中国の思想、政治変化を密接に反映させる華人社会における文芸を検討するにあたって、まず中国の新文学運動の状況を概観する。

五四運動以後は無数の文学団体や雑誌が出現し、新思想、新文化運動が吹飛ばされたが、中でも文学研究会と創造社は中国新文学運動の牽引者であった。

1921年に成立した文学研究会は、「新青年」以来の文学革命を受け継いで写実主義をとえ、作家は社会の病苦と新旧勢力の闘争に目を向け、社会の暗黒面を暴露し、抑圧されている人々の側に立たなければならないとして現実主義を主張するものであった。

一方同年夏に作られた、日本留学生を中心とする創造社は、感傷、頹廢、逃避或は反抗、挑戦という二面を持ちつつロマン主義文学を提唱して活動した。創造社のロマン主義を成仿吾の言葉で代表させると「……芸術に興味のない人が芸術家を理解することができないのと同じことだ。少くとも一切の功利打算を棄て去り、専ら文学の“全”と“美”を追求する所に、我々が生涯身を置く可き価値の可能性があると思う。……」(成仿吾「新文学之使命」1923)というのが元来の姿なのであるが、日本での生活経験を持つ彼等は「一方では資本主義の悪と、反植民地化した中国をはっきりと見つめ、現実の社会に対する憎悪と、国内外で加えられる彼等に対する圧迫の前に反抗の心情を強くする。また一方では、外国に長く居住したことから懐郷の念強く、帰国して中国の現実を目のあたりにして虚無を感じ、さらには祖国に対する悲哀と愛情が悲憤となる。……」(郑伯奇「中国新文学体系」小説三集導言)というような現実の中で「内心的要求」に従って“自我”を表現していくのである。だから瞿秋白が指摘するように、彼等は「プチブルの流浪する知識人」であって、依然として半植民地的中国社会の桎梏の中で呻吟している“時代の子”であったのである。しかしそこから導き出された方向は“逃避”ではなく“反抗”であった。郭沫若は「我的文学新運動」の中で次のように言っている。「野獣のような武人の専横、廉恥を知らぬ政客の動き、そして貧乏な外国資本の圧迫……、我々は戦乱の惨禍にさらされ、資本主義という毒龍の爪に弄ばれている。光明の前には混沌があり、創造の前には破壊がある。鳳凰が再生するには、まずその屍を火葬しなければならない。我々の事業は混沌の中にあり、まず破壊から始めなければならない。我々の精神は反抗の烈火で燃上がっている」、そして反抗は「我々は資本主義という毒龍に反対しなければならない、……我々の運動は文学の中で無産階級を爆発させるものである」(同「我的文学新運動」創造週刊、1923. 5)という明確な姿勢の表明となって行く。

時代は中国共産党が成立(1921年7月)し、全国的に労働者組織が結成され、帝国主義と結託する軍閥政治に対する反感が高まり、革命の新たな潮流が文学に方向を与えつつあった。大衆的基盤と革命軍を必要としていた孫文は、北方軍閥とのシーソーゲームや、広東の半分を占拠する陳炯明軍の直接的脅威に直面し、1923年には国民党の改組を決意した。その前年にはヨッフェが日本への途次上海で孫文と会い、国民革命に対する支援と旧ロシアの条約特権を一切廃棄することを約束し、中共三中全会(1923年)では国民党との合作が決議され、翌年1月の国民党第一次全国代表大会でも中共黨員の入党許可が決議され、国共合作は行動に移された。こうして第三インター顧問団の指導の下につくられた新組織を通じて、共産黨員は国民党の内外において大衆を組織し、闘争を指導することができるようになったのである。

こうした現実政治における革命勢力統一の方向の中で、文学運動の階級的旗幟はいっそう鮮明となり、文学研究会系統の作家は革命的現実主義を標榜した。創造社では郁達夫が「現実の我々は革命前のロシアの青年と同じく受難の時代にある。しかしまっすぐに前進しなければならない。……世界中の無産階級、文学、社会において抑圧されている同志！我々は団結して世界共和の階級を結びつけ、理想を実現しなければならない。未来は我々のものであることを確信する。」（郁達夫〈文学上の階級闘争〉1923. 5）と言って革命の情熱を表現している。創造社の「自我」は現実を受難し、苦悩する自我であったのである。だからその創作の方向も現実から出発するものであるが故に1925年5. 30事件によって高揚する革命的気分の中で、創造社は最初に革命文学を提唱したのである。郭沫若は〈革命与文学〉（創造月刊、1926. 4）の中で「個人主義的自由主義を根本的に取除き、ロマン主義文芸も徹底した反抗的態度をとらなければならない。青年よ、自身の生活を堅実にし、文芸の主潮を見定め、兵士の間に、人々の間に、工場に、革命の渦中に行け、我々の求めている文学はプロレタリア社会主義に同情する写実主義文学なのである……」と言って、生活の現実、革命の場に行って書かねばならないと呼びかけた。さらに成仿吾も〈从文学革命到革命文学〉（〈文学革命から革命文学へ〉）と題する一文で自ら創造社を総括して「創造社はプチブルを代表する革命的インテリであり、ロマン主義や感傷主義というプチブル特有の性格は、ブルジョワに対しては革命的であるとは言える。しかし我々がまだ革命的インテリの責任を担って行こうとするならば、再度自己否定しなければならないし、階級意識を持って労働大衆の言葉に近づき、労働大衆を対象としなければならない。換言すれば、我々の今後の文学運動は一步前進し、文学革命から革命文学へと進まなければならない。」と言い、従来の創造社と訣別して、プロレタリア革命文学へ転じたことを表明した。

こうしてこの時期に中国新文学運動は五四以来の反封建主義、反帝国主義という基本思想を中心に、さらに革命文学という明確な方向へと前進を始めていたのである。

### 3. 華人文芸発展の特徴

#### イ) 先 駆

模糊とした姿で出現した華人文芸も、1925年7月、新国民日報に設けられた文芸副刊「南風」が出されてから本格的な活動が始まる。「南風」は、拓哥、夢葦、應平の三人の文学青年の活動の場であった。その基本的態度は「現代の人生は全く苦悶の象徴にすぎない、何時でも何処でも何事でも、どうしてもなくそうになっているだけで、無味乾燥で話す可き楽しきなど全くない。……醜惡な社会、醜惡な力<sup>(5)</sup>が大手を振っている。どうして自殺、遁世の思想がともに現われないのだろうか……」と言って、現実の人生を苦悶であるとする認識から出発する。そして逃避か自棄的情况に沈むか、或は反抗する道を選ぶかという岐路において、拓哥は創造社の郭鼎堂の言葉を引用して「我々の精神は退くことを許さない、……人生の戦士として醜惡な社会と闘う」という道を示したのである。しかしこれを以って「南風」は「中国創造社の先端思想を反映して、明確な立場を表明した。」とするのは早計である。<sup>(6)</sup>

拓哥自身は上記のようなロマン主義の積極性をうたうと同時に、本質的には逃避、頹廢的ロマン主義の消極性を色濃く留めていたのである。「南風」発刊の辞として「南風之歌」<sup>(7)</sup>と題する百行を超える長詩を書いている。その一部を以下に引用するが、

南風飄渺吹来	南風一陣吹き来たりて
載満詩的情緒	詩情を運ぶ
沁入詩人心房	詩人の心に入りては
詩人快把詩釀	疾く詩を釀せよ

釀成満目琳琅	釀せよ豊饒の
鮮艷美麗詞章	艷麗なる歌を
散在人間世上	人間世に散ずれば
世人争相歌唱	人争いて歌わん

唱得鳥語花開	歌いては鳥語り花開き
河干柳枝輕擺	岸辺の柳枝の軽やかなる
雙雙麗人走来	麗人二人連れ立ちて
娉婷婀娜徘徊	たおやかなりしその姿

細聽河流汨没	流れの音に耳澄ませは
静聞愛潮澎湃	静かに聞ゆときめきを

この句の中には「美」を追求し、「美」に憧れる心情が溢れていて、時代の人生を苦悶、社会情況を醜悪とする認識からは乖離したものである。そして現実に対しては、

忘卻現実、	現実は忘却せよ
掠奪、戦争、買賣	略奪、戦争、買賣
南風、南風、南風	南風よ南風よ
快吹！吹遍世界	世界に吹きわたれ！

南風、南風、南風	南風よ南風よ
快吹！吹遍世界！	世界に吹きわたれば
人們都像我儕	人々は皆われらと同じ
我們這般欲愛	われらのこのよろこびよ

忘却して内面の世界で南風のよろこびをかみしめよと言うのである。拓哥の「南風」発刊以前に書いた詩も皆感傷的気分の濃厚なものであった。

彼はまた小説も書いている。〈感冒〉<sup>(8)</sup>と題する短篇では、少女美雲の性の目覚めを扱い、少女の微妙な心理をロマンチックな筆致で巧みに描いているように、彼はむしろ初期創造社の影響の中に止まっているのである。瞿秋白の言う「プチブルの流浪する青年知識人」であって、当時革命文学へと転向しつつあった創造社からは遅れているものである。

郁達夫は「私の抒情時代は惨酷な軍閥が専横する島国で過ごしたのです。遙かに祖国の荒廃をのぞみ、身は異郷で屈辱にあい、感じると思うこと、体験することの全てが失望であり、傷つかないことはなかった。夫を亡くした若妻のように、全く無気力で勇気もなく、哀

切の悲しみを表現したのが、多くの非難をあびた『沉淪』だったのです。」と言っているが、拓歌も同様に異国に客住して辛酸を嘗めた流浪する青年知識人であり、郁達夫と相似た境遇に身を置いていたのである。

「南風」は同年10月には停刊してしまう。拓歌は安徽省の人で、当時弱冠20才であったという。その後日本に行き、恋愛問題で自殺未遂事件を起こし、牢囚の身となったと伝えられているだけである。<sup>(9)</sup>

いずれにせよ華人文芸の発展は創造社の影響を受けて始まったと言えるのであるが、そこで意識されている社会は中国であって、植民地マラヤの華人社会ではなかった。

南風の停刊と前後して、同年10月シンガポールの叻報紙上の副刊に「星光」が発刊される。「星光」は執筆者も多く、創刊よりその態度を明確にして、1)中華文化を発揚し、南洋社会を改進する。2)平和的な感化を進め、矯激な態度はとらない。3)教育、文芸、雑談の四項を主な内容とする、<sup>(10)</sup>と言っているように純文芸の副刊ではなく、啓蒙宣伝的性質を含むものであった。

星光同人は「南洋は零落した社会であり、停滞し、半身不随である。」と規定して「我々流浪の一群は何時何処でも不満を感じているが、特に南洋の病める社会は不安さを感じる。どのような社会でも少数の青年、社会の白血球、時代の先駆者となる者が立ち上がって社会的誤謬を暴露し、改造の方法を示すものだが、南洋の何処にそのような青年がいよう。……、今後は批判的態度で南洋の全ての価値を新たに評価しなおす。我々は南洋社会を改造し、南洋の思想を澄ませ、文壇を刷新して暗黒の時代と力の限り戦う。」<sup>(11)</sup>と言ってその目的と使命感を表明している。ここで言う南洋社会とは、中国社会と連続した意味での華人社会であり、旧勢力とは華人社会に蔓延する旧社会の慣習、価値観である。

編集者の譚雲山は、旧社会、旧道徳を攻撃する散文をよく書いたが、「先輩諸氏、私は皆さんの長寿を祝福しますが、よけいな事に係わって『世道不古』などと老いの気迫を出したりせず、後進に活動させて下さい。……今提唱されている白話文は古法を毀し国粹を滅ぼすものであると憤慨するお年寄りがいるけれども、古は元来言文一致であったのを知らないのですか。……」<sup>(12)</sup>と言うような妥協的姿勢であった。矯激な態度はとらないと言明しているのであるから当然ではある。しかし5・30事件後の中国文壇の急進的情况から見れば、明らかに遅れていることになるが、これは苗秀が批判するように華人文芸の発展に有害であったと評価す可き性質の問題ではない。「星光」同人の段南奎が〈流浪與幸福〉<sup>(14)</sup>の中で「五四運動以後の一群の青年がそうした流浪の民である」と言っているように、「流浪の一群」と自称する「星光」同人達も、五四以後中国から流入して来た青年教師達であって、五四以来の新思想によって閉塞的華僑社会を啓蒙しようとしたのであった。だから同人の李玉梅が稚拙ながら、その詩〈我是一個人〉（「星光」第70期）の中で、

「媽媽、我不是狗、我不是你的賠錢貨、  
世不是爹爹的千金  
媽媽呵！我是個人、我不能被縛着  
我要去做人的工作！」

と叫び、礼教に反対し女性解放の問題をとりあげているように、中国におけると同様旧社会の価値や習慣に対する挑戦をマラヤの華人社会で試みたのである。

「星光」は翌1926年9月に突然停刊する。流浪の一群は北伐開始後間もない中国に帰り、革命運動に身を投じて行ったという。<sup>(16)</sup>

「星光」は社会批判が中心であって、注目すべき文芸作品は見られないが、五四以後の反封建反侵略の新思想を宣揚する新文学運動の重要な一環に位置するもので、「南風」と並び華人文芸の発展を勢い付ける役割を果たしたのである。

## ロ) 華人文芸のマラヤ化志向

「南風」と「星光」は相互に何のつながりもなく、中国文壇の息吹を伝えて消えてしまうのだが、この時期より新文学を標榜する文芸副刊が急増する。<sup>(17)</sup> こうした中で顕著な二つの方向が見られる。一つは中国文壇の影響に従ったプロレタリア文学の出現であり、一方では華人文芸のマラヤ化を志向する一団が現われるのである。

文芸のマラヤ化志向は、言語、種族は同じであっても、帰属意識において中国とは一線を劃そうとする後の華人文芸の方向を示すものであって、中国の政治変化を直截に反映する華人文芸史上に底流する独自の態度であった。これはおおそ次の三つの傾向に分けられる。第一は既に述べた「星光」のように閉塞的華僑社会の諸矛盾を批判はするが、マラヤに対する帰属感が薄いもの。第二はマラヤ華僑の日常生活を描写し、マラヤの地における独自の生活と帰属感を描写するもの。第三はプロレタリア文学と合体したもので、階級的連帯の意識の下に地方的題材を位置づけるものである。第一について代表的な作品は「浩澤」（1926年12月6日、新国民日報）誌上に発表された呉仲青の〈辜负了你〉<sup>(18)</sup>であろう。同作品は華僑教育が、一部の無知で保守的な学校理事によって発展を妨げられている様子を描いたもので、華人文芸史上の秀作といわれている。以下にその要旨を訳出する。

N市の中華学校の理事会が「僑南クラブ」で開催され、例によって総理と経理は再任された。総理の鄭貴娘は席上「来年度は、学校の徹底的改革を行わなければならない」と提案、その内容たるは、課外活動を廃止することで、図画工作、音楽、体操も必要なしとするものであった。その理由は「近ごろ社会的評判のよい学校がないという声を聞く。……、課外活動は子供たちにとってつらいもので、夕食にも間に合わないという者もいる。図画工作は無駄な金を使うばかりという者もいれば、体操などはマレー人の子供と同じように街中を飛びはねるようになるだけで、音楽は将来芸人になる準備のようなものだという者が多い」というものであった。そこで会がなければ姿を現わさず、席がなければ発言せず、発言すれば間違ったことを言ったことはないといわれる評議長が総理に合わせて笑いながら発言する。

「これは全く世間の人々がそういうばかりではない。私も総理の意見と同じです。うちの子供をみても、字典を側においてゴム百斤、ヤシ二百、やれゴム三十元と言って書かせても書けないくせに、便所の戸や、客間の壁を白墨や木炭で汚し、猫や犬や羊を書きなぐっている。驚いたことは先月、便所の戸に素裸の動物の抱擁した姿が描かれていた。……人様に見られたら全く笑い話になってしまう。『こんなものを誰が書けと言った』と子供を折檻したら、『先生が図画の練習は大切だと言ったんだよ』というのには二の句も出ませんでした……」

「これはまだまだ序の口で、そら恐ろしいのはその後です」、評議長は深く息をついて、

「ある月のきれいな晩、歌の大好きな広源號の子供が妹と一緒に月を眺めていたが、突然数日前同級生の歌っていた歌を思い出し、妹を相手に歌を歌いダンスを始めた。これを豊順の子供が聞きつけ、啓蒙館の林静斎先生に、『空の二つの星』だ、『世の中には私たち二人』だ、『心は溶けて一つになる』とかなんとか歌っていたのだと言うのだが、子供が恋愛の歌を、妹を恋人に見たてて歌うなどとは、何という音楽を教えているのだろうか」

こうして情操教育の課目が全部消されたばかりか、「学校改革」の為に校長も解雇されることになった。理由は「麵食」の北方人が、我々南方の米食の子供を教育するのは結局無理がある」というもので、これに代わって校長に選ばれたのは、子曰館<sup>\*</sup>の林静斎老先生であった。父親の理事の代理で理事会に出席していた梓南は、中国の大学を出てN市に帰ったばかりであったが、こうした様子を見て「今回の帰郷は皆重大な使命を持っている、我々はこの使命を完成しなければならない……」という級友達の送別の言葉を思い出し、「使命？ 終りだ、全て終りだ」と咳やく。

※「子曰館」とは「子曰…」で始まる論語をはじめとする古典をつめ込み教育する旧式の塾を皮肉をこめて言うもの。

恐らく梓南は作者自身の投映であろう。同人の禾草の文中に、呉仲青は「獵犬のように忙しい。校誌、編劇、昼の授業、夜の授業に追われていた。」とあるが、彼は教職にあって華僑教育会の現実を批判を込めて描写していたのである。呉仲青は恐らく梓南のような僑生（現地生まれ）ではなかったであろう。彼が中国から流入して来た教師であることは、北方出身の校長が南方の子供達を教えるには無理があるとして解雇される場面に籠められた華南出身の華僑の地方主義の指摘がよく示している。ここには「星光」流の青年知識人の社会改革に対する使命感と情熱が表現されているのだが、同時に1920年の国語改革運動以来、マラヤに流入してきた多くの青年教師達の苦悩が集約されているとも言える。使命感を持ちながら、学校経営者側（華僑の幫団体を中心とする商人達）の保守性、無知の故に、教育の改革が遅れて行く。呉仲青が梓南に「終りだ」と咳やかさせたように、この時期の思想性を持った青年教師達の民族主義は行き詰まりを感じていたのであろう。

中国では、国共合作による革命勢力の統一によって、五四運動以来の高揚する民族主義が反帝国主義のもとに総括され、文学は革命文学として方向づけられていた。中国のこうした情勢を反映して、マラヤ華人社会においても政治的には反英反植民地主義の気運が興起しつつあったのであるが、同時にそれは植民地政府の華僑教師や教科書に対する厳しい干渉をまねくことになった。さらには若い左派主導の国民党マラヤ支部は、華僑社会の実質的指導層である商界が離反したために、全く分裂して、植民地、複合人種社会という特殊な情況下における指針もないままに、中国本土の政治変化を反映して、政治行動に突出しようとする情勢にあった。こうした政治情勢と並行して華人文芸の方向も、また中国文壇に続いてプロレタリア文学が提唱され始めた時であったから、梓南の使命感と民族主義に代表される華僑青年知識人の多くは、方向の選択に直面していたと言えるのである。呉仲青は手堅い短編を多く書いている。華人文芸史上では重要な作家であるが、プロレタリア文学の興隆期にも影響は受けていないようで、プロレタリア文学に属する作品は「梯形」と題する一篇を書いたのみである。それが彼の選択であったのだろう。

社会の病弊を批判する視点から華僑社会を見つめる傾向がある一方、さらに進んで華人文芸のマラヤ化を表現したのは、新国民日報の副刊「荒島」(1927年1月創刊)の同人達であった。「南洋の色彩を題材とした、南洋群島中の得難い文芸誌である」と自賛しているように、実際にマラヤの現実生活を反映する地方的特色に富んだ作品を創作することを目的とした。同人の張金燕は「荒島」の創作に参加するよう勧められた際に、多年文芸活動から遠ざかっており、しかも「……我是本地薑、從來未受北風的。」(「私は土地っ子だから、中国の文芸思潮の影響を受けたことがない。')と言って断る。中国の文芸思潮に占められた華人文壇では書けないというのであるが、南洋の特色を文芸に取り入れる方針で進めることを聞いて参加に同意したと語っている。<sup>(21)</sup>「荒島」は創刊後しばらくすると、華人文壇において「華僑の出版物にはほとんど見られない傾向であって、実に得難いものである」と称賛されるようになる。<sup>(22)</sup>華人文壇では中国に題材を求めたり、或は中国社会との連続における華人社会に題材を採るのが一般であり、華人生活の内側から日常を描写する作風が新鮮に受けとめられたものである。「荒島」同人の作風は写実的で、大量に大衆口語、方言、或はマレー語を使用し、中国的紐帯からは離れているもので、当時の一般的作風とは趣を異にするものであった。以下にLS女士の「榴蓮」(「ドリアン」)の一節を紹介しよう。

父は左手でふきんをドリアンに被せ、右手で三角の短い棒を持ち、ドリアンの尾ばの方をめがけて突き刺してから、唇を噛みしめて、力いっぱいドリアンを剥いた。

母も手伝っていたが、私を見かけると微笑みながら「早くおいで、お一熱い！父さんはもう三つも剥いたのに私はまだ一つも剥いていない」と言いながら、棒を私に手渡した。

私も力いっぱい剥こうとしたが、ドリアンがくると回って、人差し指をドリアンのトゲで刺してしまった。……

父はポケットからハンケチを取り出すと額の汗を拭いて腰掛けた。私達もみな腰掛けてドリアンを食べ始めた。

「わあ！これは黄色に熟れた実だ」

妹は大喜びでそう言った。

「僕のはこんなに種が小さいやつだ」

「一斤いくらでしたか、今年のドリアンは高かったかしら」

母は食べながら父に尋ねた。

「あててごらん」

「1ドルでしょう、お父さん」

妹はドリアンでいっぱいの口を横から出して言った。

「そんなに高くはないでしょう」

「1斤60セントだよ、全部で10数個買って来た」……

父が話し終らぬうちに、突然人が訪ねて来た。門口に立って左手で帽子を握み、右手のハンケチで鼻をつまみ、入ろうとしない。

「やっ！何先生どうぞお入り下さい」

「いや、ここで失礼します。会社の方で先生に相談したいことがあるとかで、早くお出かけ下さい」

その人はまだハンケチで鼻をつまんでいるので声も聞きづらい、風邪でもひいているよう



だが、見た所何でもなさそうである。

「そうですか、一寸待って下さい。すぐ参ります」

「おねがいします」そういうと、その人は帽子を被るなり飛ぶように戻って行った。

「彼は中国から来てまだ一週間もたっていないからドリアンを食べられないんだ。猫のおしっこの臭いがするとか言って、ドリアンの臭いがするとすぐ逃げ出すのだよ」

父は言い終ると立ち上がり、手を洗った。

「それでもドリアンを見て逃げ出す新客が、そのうち好きでたまらなくなるのはどういう訳なの」

「それは慣れるということさ、昔の人が『悪い人と交わることは、鮑売りの店に入るようなもので、長くその臭いをかいていと臭くなくなる』と言っているだろ、食べる物も同じさ」

父はそう言い終ると上着を着て、鏡を見てから出かけて行った。……

私達が食べ終ると、母は水を飲むように言いつけた。

「私飲みたくない、飲むとお腹が痛くなったりするから」

妹は首を振っていやがった。

「ドリアンを食べて水を飲まない人はいないのだよ！ドリアンは熱性なのだから水を飲んで解熱するのです。はやく飲みなさい、飲んでもお腹は痛くなりません、飲まないで病気になっても知りませんよ」

母に厳しく言われて、妹はゴクリと清水を飲みほした。

ドリアンの匂いに慣れない「新客」の姿態を、ドリアンの食後は清水を飲んで解熱するという南洋の風俗にすっかり溶け込んだ華僑と対比させることによって、マラヤに根を下ろした華僑の実際の生活の場を描く作風がよく表現されている。

また「荒島」同人の社会批判もあるが、これも「本地薑」の面目を発揮するものが多い。中でも黄振彝<sup>(23)</sup>は以下のような小気味よい評論をよく書いている。

〈誘婚的募捐〉<sup>(23)</sup>（〈花婿募集の様な募金〉）

南洋社会では、毎年当地の公益の為の募金以外に、祖国から花婿捜しのような募金運動がやって来る。彼等は「南洋伯」は愚かな金持ちで簡単に騙せると思っているようだ。

到着すると、まっ先に裕福な人々の門前にお参りして、華僑の愛国心は見上げたもので、その為には力を惜しまないとか、うまい事を言っておだてあげる。裕福な華僑は千萬元の募金名簿を双手で捧げ出すが、何に使われるか気にとめていない。

華僑の帰国歓迎とか優遇とか、甘い言葉を言うがみな嘘だ。華僑が帰国すれば僑民ではなくなるのに、何を歓迎優待するというのか。裕福な華僑はもう騙されるのは止めにして、真の公益と慈善事業に使うべきだ。

因に「荒島」を掲載している新国民日報は国民党紙である。学校や新聞の経営は商界上層に属するもので、国民党の影響力が最も大きな部分であった。「荒島」同人は何でも直言したために教育界から非難され、結局新国民日報と衝突して1928年7月には停刊する。<sup>(24)</sup>

とまれ「荒島」は、意識して華人文芸を中国文芸の附属的な位置から脱却せしめ、独立発

展の方向に導こうとしたわけではないが、将来の方向を暗示するものであった。時代は華人文壇においても中国の状況を反映して革命文芸が主流となり、北伐に題材を採る傾向にあったが、その方面からの揶揄に対して、「荒島」同人は「何故我々は革命の文字を書かないのかと尋ねられるが、我々はこれまで反革命の文字を書いたことがあろうか、……。およそ反革命でなければ革命である。」という態度に止まった。華人文芸のマラヤ化志向の初声はプロレタリア文学の興起に押し流されようとしていたのである。

#### 4. 国共合作の波及とプロレタリア文学興起の間

##### イ) 政治状況の検討

マラヤにおける左翼政治活動は、夙に1914年、ペラクで国民党支部活動の衰退に従い、一部党員が労組を組織して社会主義的主張をしたことが報告されて以来、1919年の排日運動では「誠社」(当時広州の共産主義者組織であった「新社」のマラヤ支部)の活動が見られ、1922年からは共産主義関係の文書が多く流入し始め、1923年には、ソヴィエト・ロシアで訓練を受けた海南人の夜学教師 Han Kuo-Hsiang の日記文書によって、国民党へ入党するよう学生を指導していたことなど、一連の報告がなされている。

こうして1924年には、国共合作後広州の国民党南洋総部の指導の下に、マラヤ国民党の改組が始まった。当初多くの党員が反対し、ペラク、セランゴール、イポーの支部は孫文の連ソ容共を非難した。これに対して孫文は、党からの追放や逮捕命令を出すなど厳しく臨んだのである。

合作国民党マラヤ支部が左派主導になって行くと同時に、1925年上海の5・30事件及び香港の沙面事件<sup>(30)</sup>によって湧き上がった反帝国主義の気運を背景にして、多くの反英宣伝文書が広州から大量に流入するようになり、マラヤでも反英気運が盛り上がり始めた。ペラクでは広東人女性による華民保護司(英国人)殺害未遂事件が起こり、セランゴール、イポーでは孫文追悼の日に営業した華人酒店に爆弾が投げられるなど、他所でも類似の事件が多発した<sup>(31)</sup>。このためイギリス植民地政府は、同年登録されているマラヤ聯邦州の国民党支部の解散命令を出したのである。しかし合作国民党支部の活動は夜学を拠点として続けられた。厳重な取締りのために、海南人を中心とする国民党第一支部(シンガポール)などは、一時77人にまで減少したが、それでも1927年3月牛車水事件(Kreta Ayer Incident)発生の前には309人にまで増加している<sup>(32)</sup>。学校は教師達が糧を得る場でもあり、思想・文化活動を行なう場でもあった。換言すれば学校は、知識人青年の生活を保障し、思想活動の場を提供したのである。このため植民地政府は、同年学校登録条例を改訂し、学校の最低生徒数15人以上という規定を取り消すことによって、少人数の学校を多設するという逃げ道を封じると同時に、教職員の経歴や身分の詳細な登録を規定し、視学官の立入権限及び追放などの罰則規定を強化し、文書検閲を新たに規定したのである<sup>(33)</sup>。

それでも学校が活動の場であることに変わりにはなかったのである。1926年にはシンガポールの済民学校に集合した41人の教師が全員逮捕されるという事件が発生した。共産主義細胞組織の形成と孫文死後一周年の追悼大会を反日ボイコットを兼ねて行なうことを謀議中に植民地警察当局に襲われたものであった。中華総商会の一部会員商人の密告があったためである。この事件のために閉校処分となった学校の生徒400人余が抗議のデモを行ない、総商会や中国領事館に当局との中介を嘆願したのだが、参加者のほとんどは海南人労働者であったとい

う。

中国では当時労働者組織が各地で急増していたが、マラヤでも組織活動が展開されていた。1926年5月には「南洋各業職工会」が結成された。この組織は海南島の革命組織「瓊崖革命同盟会」の指導でつくられたもので、同年中の規模は5支部、千人程の会員を擁するものであったが、牛車水事件の前までには全マラヤに広がり、42支部、会員数五千人にまで増加している。また夜学は1925年76校、学生 2,321人、1927年には62校、2,822人に減っている。このように合作国民党マラヤ支部左派も独自の活動組織を形成する一方、植民地政府の国民党解散命令以後も従来のマラヤ国民党の組織網を利用した。同盟会時代から革命宣伝のために設立された夜学や書報社等の組織網は、左派に活動基盤を提供することとなったのである。夜学は成人教育の場であり、学生は労働者が中心で、元来政治的性格が強いものであった。また書報社も中国の事情を大衆に提供する宣伝の場であった。こうした宣伝網を通じて、当時の反帝国主義、反軍閥、プロレタリア思想は宣伝され、華人社会の左翼政治行動へと結びついたのである。

因に1925年のマラヤ国民党の規模は総支部1、支部14、地方支部71、地区支部81、党員4,370人、発行新聞6紙、直系学校66校、宣伝組織15であった。これら各支部は、改組後は広州の国民党南洋総部に直属しており、旧党員の指導権はなくなっていたのである。

このような状況下で、この時期最大の政治イベントである牛車水事件が発生するのである。

1927年3月12日、前年の国父孫文の追悼大会は済民学校事件で潰れたが、同年は穏健な福建幫の南安会館の指導で植民地政府と交渉がなされ、示威行動、演説、国旗や党旗の装飾を禁止するという条件で開催が許された。当日会場は孫文を称える歌声につつまれ、秩序は保たれていたのだが、参加していた二千人の海南人の中から突然演説が始まり、ピラを撒き、1)国民党は孫文の意志を継いで帝国主義、軍閥を打倒し、自由と独立の為に国民革命を完成させよ、2)華僑は目覚めよ、立ち上がって革命勢力と国民党旗の下にイギリス帝国主義を打倒せよ、3)華僑は団結して植民地政府の圧迫に対抗せよ、と呼びかけた。そして海南人の一群がデモ隊を組織して行進する只中にバスが突入したために、怒ったデモ隊はバスを追い、Kreta Ayer の警察署前にさしかかったのを機に警察署を襲った。そのため警官が発砲して死者6人を出す事件となったのである。

事件後反英感情は一層高まり、ピープルズパークで暴動が起こり軍隊まで出動した。そして夜学や学校に対する取締りや文書の検閲が強化されて行ったのである。

国際共産主義運動の視点からこうした状況を検討してみると、活動、宣伝は華人社会内に限られており、他のアジア諸国の一連の運動のようにコミンテルンの直接的指導はない。これはマレー人の政治的覚醒が遅れていたこと、また英国共産党がマラヤで見る可きほど活動しなかったこと等の理由が考えられるが、より重要なことは、反帝国主義のスローガンも中国ナショナリズムの運動の上に進行していたので、マレー人社会とは係りをもたなかったことであろう。もちろん1925年、コミンテルンの東南アジア代表タン・マラカの要請により、中国共産党は傅大景を派遣して華僑左翼とインドネシアの革命勢力との連携を試みた。また同年ジャワの蜂起に失敗したタン・マラカ、スバカット、タミン、アルミン、ムソ等のインドネシアの工作員もシンガポールに逃れてから、やはり華僑左翼の運動に呼応してマレー人に対する工作も行なっている。しかしタンの指摘に従えば、マレー人の怠惰と現状満足の故

に宣伝効果はなかったのである。<sup>(42)</sup> それでもこの時期の華僑の左翼運動は、1920年に第2インターで採択されたレーニンの路線上に位置付けられるものであろう。ヨーロッパ資本主義の資源的後背地であるアジアの植民地を攪乱し、ヨーロッパ資本主義を崩壊に導こうという路線は採択されたが、その後の一連の会議にマラヤの代表は参加していないし、コミンテルンのブループリントにもマラヤの革命は入っていない<sup>(43)</sup> だったのである。しかし共産主義者と民族主義者の協力を決定した第2インターの路線を受け入れた中国共産党によって、その役割が演じられたと言えるのである。

#### ロ) プロレタリア文学の始まり。

華人文芸におけるプロレタリア文学は、中国におけると同様に革命文学とともに提唱された。ペナンの南洋時報紙上に前後して発刊された「莠」(1927年4月)、「海絲」(1927年4月)、「詩」等の十数種の副刊がその導火線となった。

当時の模様を金恵吾の「馬華新文学史稿補遺」<sup>(44)</sup> からたどってみると、やはり中国から南来して教育界に足場を置いて執筆する者がほとんどであった。また往々にして同じ学校の教師達を中心となり、稿料など全く無く、情熱をもって僑生の同好者を巻き込んで行ったという。1927年から1931年までに発刊されたプロレタリア文芸副刊は30種以上になるが、こうした隆盛の背景には、1926年に南洋時報の編集長となった林浪漚の文芸活動に対する積極的な姿勢があった<sup>(45)</sup> からで、1930年に彼が解雇されるまで、同紙の副刊は一貫してプロレタリア文学の砦となっていた。こうした活動を進めていたのは中国から流入する青年教師が中心であった。

表を見ると、当時毎年百人以上の教師が増加していることが分る。華人社会の近代教育は小・中学校が大半を占める初期的事業段階であったから、現地で毎年これだけの教師を養成することは不可能な事である。金恵吾はこうした教師を指しているのである。であるからこの時期の華人文壇では、題材を中国に採る傾向の作品が多く、後に僑民文芸として批判を受ける作風の祖形となったのである。

しかし老舎が「我怎樣写二馬」の中で書いているように、国外の中国青年知識人は、毎日ピンを地図に刺しては北伐革命軍の動向に一喜一憂するほどに愛国心を募らせていたのであるから、土豪劣紳の非道や貪官汚吏の横暴、北伐革命の変質や知識人に対する弾圧等中国の社会状況を題材とする作品が顕著であることは当然であったと言えよう。だから「荒島」同人に対して「なぜ革命の文字を書かないのか」と批評したのである。

そしてこうした作品と同時に、階級性を表現した作品が急増して来るのである。しかし

マラヤの華僑学校・学生・教師

Year	Schools	Students	Teachers
1921	252	—	589
1922	391	—	980
1923	357	—	1,362
1924	464	27,476	1,257
1925	643	33,662	1,390
1926	657	36,380	1,493
1927	665	40,760	1,637
1928	696	43,961	1,806
1929	711	46,911	1,900
1930	716	46,367	1,980
1931	657	39,662	1,867
1932	669	41,858	1,929
1933	731	47,123	2,021
1934	766	54,618	2,371
1935	824	62,014	2,730
1936	860	70,483	3,058
1937	933	79,993	3,415

出所: Leong, Stephen Mun Yoon

Sources, Agencies and Manifestations  
of Overseas Chinese Nationalism in  
Malay, 1937~1941, p. 121.

この時期においては、以下に例示する〈得意人間的歌〉<sup>(47)</sup>と題する海若の詩の一節のように、初歩的な意識を表明する作品が中心であった。

飲吧！飲吧！	飲め新鮮な血を！
新鮮的血	人々から絞りとった
從人們那裏纔搾出來的	ばかりの熱い血を熱烘烘的。
工人的汗後底血	働く者の労働の血を
清涼涼の士子腦中血	読書人の腦裏の血を
甜蜜蜜の小販心裏的血	物売りの甘い血を

しかしマラヤ華人文芸の特徴として指摘す可き新鮮な作風の優れた短篇もあって、華人文壇の階級を主題とした文学の方向を示している。王探の短篇〈育南與但米〉<sup>(48)</sup>（〈育南とタミ〉）は、英人医師宅のマレー人下男の息子タミと、その英人医師の友人の華僑の息子育南の友情を通して、植民地の民族解放と階級問題を突いているのである。華人プロレタリア文学は「荒島」流の「南洋色彩」という方向を發展的に吸収して、マラヤに根を下ろし、隆盛期迎えるのだが、同作品はその嚆矢とも言うべき作品と言えるのである。以下にその要旨を紹介する。

育南はタミの父親が酒に酔い、主人に打たれているのを見る度に心を痛め、タミに「何で君の父さんは酒を飲んではいけないの、主人が君の父さんを打っているけれども、君は何で黙っているの」と尋ねる。ある太陽の照りつける午後、子供達が木蔭でひと休みしていると、医師の息子のジェームスがタミに跨り馬に見立てて、タオルを鞭がわりにして遊ぶ姿が見えた。ジェームスは笑い声をあげ、タミは歯を食いしばり、ヨロヨロと進んで行く。育南は耐えかねてジェームスを引きずり下ろし、タミを助けおこし、ジェームスに「お前が馬になれ」と命じると、彼は恥ずかしそうに逃げ去ってしまった。この事件を医師が育南の父親に告げると、育南の父親は不気嫌に育南を呼びつけ「タミのような卑しい人間と遊んでいると、お前の体面を傷つけ、皆お前をばかにするようになるぞ、タミの父親は雇われ下男だからタミもそうなるのだ。タミは臭くて黒いし、教育も受けていない、ブタと同じだ。そんな人間と一緒にいても何の利益もない。卑しいタミと仲良くして、ジェームスのように高尚な人間と仲良くしないとは、この愚か者！タミは卑賤な弱い民族だという、ことが分かんのか！」と罵る。育南は、「そうだ人間はよい香りがして、聡明で、高尚で、強大で、仲良くしてこそ幸福なのだ。臭くて、愚かで、卑賤で、弱小なことは永遠にそのままなのだろうか。愚かな者を聡明にし、卑賤を高尚にし、弱小を強大にするにはどうしたらよいのだろうか。」と考え、思わず「……だから友人になって助ける可きなのだ」と呟く。これが育南の父親に対する答えだった。

この育南の答えは、同時にマラヤの反帝運動の将来を示しているものであった。

## 5. 結 語

1925年から1928年の間の華人文芸の状況はロマン主義、愛国主義、マラヤ本位主義とも言

う可きマラヤ化志向、そしてプロレタリア文芸が各々突如出現した。それは中国文芸思想の諸要素の同時噴出であって、まだ独自の文学伝統が形成されていない華人文壇は、中国の文学運動に付随する位置にあったということである。しかしそうした中にも無意識ながら中国の文壇から離れ、マラヤに対する帰属感を表現する作風が現われたことは華人文芸史上注目すべきことであった。こうした諸要素を反帝反植民地主義、階級思想が吸収して行こうとする方向がこの時期の特徴なのである。

現実の華人政治社会に照らして見ると、植民地複合人種社会における華人社会の特殊な情況に対する明確な方針のないままに、過激な政治行動が先行突出している。とは言え左翼政治も文芸活動も学校を一つの拠点としているので、相方の脈絡は明らかであろう。文芸による階級闘争、反帝反植民地主義の宣伝高揚は、ちょうどその端緒を開いたばかりであった。

国共合作の波及でマラヤ国民党は左派主導になったが、それでも華人社会の実際の指導層は総商会を中心とする伝統的商界にあった。また大多数の労働者や小商人達は「発財」と享楽を追求するばかりで、その生活も極端な圧迫は受けておらず、階級意識はほとんど啓発されてはいなかったのである。従ってこの段階では両者ともに華人社会全体からはまだまだ距離があったのである。

とまれ同時期の華人文芸は、中国から流入する青年知識人教師の手によって、反封建主義、反帝植民地主義、民族主義を基調として、新たに階級文学を加えて発展を始めたのである。

#### 注

- 1) 拙稿「マラヤ華僑社会の啓蒙」三重大学人文学部研究紀要第1号、1984年。
- 2) 拙稿「マラヤ華人文芸の発生と背景」漢学研究第21号、日本大学、1983年。
- 3) 方修「馬華新文学史稿」上、修訂本、新加坡世界書局、1975年、3-8頁。華人文芸の分期については諸説あったが、以下の方修の分期が定説となっている。
  - ① 1919-1925、萌芽期。
  - ② 1925-1931、拡張期。
  - ③ 1932-1936、低潮期。
  - ④ 1937-1942、隆盛期。
- 4) 前掲「マラヤ華人文芸の発生と背景」36-42、48頁。
- 5) 拓哥〈赤道上的吶喊〉「南風」新国民日報、1925年7月（方修「馬華新文学大系」1巻、星州世界書局、1972年、49-51頁所収）
- 6) 苗秀「馬華文学史話」青年書局、1968年69頁
- 7) 拓哥〈南風之歌〉「南風」新国民日報、1925年7月25日（前掲「馬華新文学大系」10巻、15-21頁所収）
- 8) 拓哥〈感冒〉（同上「馬華新文学大系」3巻、151-165頁所収）
- 9) 前掲「馬華新文学史稿」上、168-169頁。
- 10) 譚雲山〈這是什么〉「星光」叻報、1925年10月19日（前掲「馬華新文学大系」10巻、22-24頁所収）
- 11) 段南奎「星光今後的態度」「星光」45期（同上「馬華新文学大系」1巻、52-53頁所収）
- 12) 前掲「馬華新文学史稿」上、170、171頁。
- 13) 前掲「馬華文学史話」89頁
- 14) 段南奎〈流浪與幸福〉「星光」新国民日報1926年4月19日（前掲「馬華新文学大系」7巻、

71頁所収)

- 15) 前掲「馬華新文学史稿」上、80、86、87頁。
- 16) 前掲「馬華文学史話」94頁。
- 17) 前掲「馬華文学史稿」91頁。
- 18) 吳仲青〈辜負了你〉「浩澤」新国民日報、1927年1月(前掲「馬華新文学大系」3巻、477-487頁所収)
- 19) 禾草「最後の話」「浩澤」新国民日報(同上「馬華新文学大系」10巻、28、29頁所収)
- 20) 教師の役割とその流入については前掲拙稿「マラヤ華人文芸の発生と背景」45、46ページに詳述した。
- 21) 張金燕〈漫浪南洋一年的『荒島』〉「荒島」新国民日報、1928年2月2日(前掲「馬華新文学大系」10巻、99-108頁所収)
- 22) 何采菽〈我對於『荒島』的建設和改造〉「新国民雜誌」、1926年2月16日(同上「馬華新文学大系」1巻150-152頁所収)
- 23) 黃振彝〈誘婚的募捐〉「荒島」新国民日報1月28日。
- 24) 前掲「馬華文学史話」120、211頁。
- 25) 同上、118頁。
- 26) F.M.S, Perak Administration Report, 1914, pp20, 21. Png Poh Seng "The Knomintang in Malaya, 1912-1914", p12 (Journal of Southeast Asia History, 1960)
- 27) 前掲拙稿「マラヤ華人文芸の発生と背景」38、39ページ。
- 28) Leong, Stephen Mun Yoon, "Sources, Agencies and Manifestation of Overseas Chinese Nationalism in Malaya, 1937-1941", Ph. D Thesis, UNIV. Californria, Los Angeles, 1976, pp222-223.
- 29) Ku Hung-ting, "Knomintang's Mass Movement and Kreta Ayer Incident (1927) in Malaya" Occasional Paper No 13, Institute of Humanities and Social Sociences, Nanyang UNIV.
- 30) 5. 30事件は、上海の日系綿工場の労働者が経営者に殺害されたことに端を発する学生、労働者のデモに対し、外国官権が弾圧を加え多数の死傷者を出した事件。  
沙面事件は、沙面街のデモ隊に対して英・日軍艦が発砲して死傷者を出した事件。
- 31) Png Poh Seng, op. cit, p26, note17.
- 32) Ku Hnng-ting, op. cit, p25.  
マラヤ国民党は同盟会以来の分幫制で組織されていた。シンガポールでは9支部に分れ、第1と第6が海南人、第2第3は混合、第4から第9支部は広東人、というものであった。
- 33) 張正藩「近六十年来南洋華僑教育史」中央文物供應社、民国45年、45-53頁。
- 34) Lee Ting Hui, "Policies and Politics in Chinese Schools in The Straits Settlements and Federated Malay States, 1786-1941", M·A thesis, UNIV. of Malaya, 1957, pp141-143.
- 35) 楊進発「戦前星華社会結構與領導層初探」新加坡南洋学会、1977年、69・70頁。
- 36) Ku Hung-ting, op. cit, p8.
- 37) Lee Ting Hui, op. cit, p134.
- 38) 海南人がこの時期の政治行動に顕著に見られる原因は、彼等が社会の下層に集中し、賤業に従事する者が多く、その結果他の華人から差別されたために心理的、経済的にも被抑圧感を抱いていたためと考えられている(Lee Ting Hui, op, cit, p135)。胡漢民によると、国民革命軍養成の為に創設された黄埔軍官学校開設当時(1924年6月)、海南人学生は他の

地方の学生よりも多数を占めていたにもかかわらず、同校の国民党政治委員から注目されなかったために、結局共産党の影響下に押しやることになってしまったと指摘している(胡漢民述、張振之記「南洋與中国革命」、蔣永敬編「華僑開国革命史料」261-292頁、正中書局、民国66年、291-292頁所収)。1920年代の海南島は合作国民党左派が権力を掌握していたのである(前掲「戦前星華社会結構與領導層初探」72頁)。

39) Leong, Stephen Mun Yoon, op. cit, pp226-227.

40) Ku Hung-ting, op. cit, p13.

41) Hanrahan, Gene Z. "The Communist Struggle in Malaya" UNIV. of Malaya Press, 1971, pp27-29.

42) ibid.

43) ibid, p25.

44) 金惠吾 <『馬華新文学史稿』補遺>「蓮花河」星檳日報1961年3月27、28日(方修「馬華新文学史稿」上巻、星州世界書局、1962年、142-145頁所収)

45) 前掲「馬華新文学史稿」102頁。

46) 前掲拙稿「マラヤ華人文芸の発生と背景」46ページ。

47) 海若 <得意人們の歌>「勞」南洋時報、1927年10月4日(前掲「馬華新文学大系」6巻35頁所収)

48) 王探 <育南與但米>「勞」1928年3月(前掲「馬華新文学大系」3巻、190-192頁所収)

49) 木然 <關於新馬文学的幾句話>「椰林」1930年4月20日(前掲「馬華新文学大系」1巻、113-115頁所収)